

一九七二年沖縄返還におもむ。

旅行あっせん部班 近藤 節夫

昨年一月一六日、私が羽田空港へ降り立った時、出迎えてくれたのは、その翌朝米国へ出発する佐藤首相を警護する機動隊だけという物々しくも、たぐいまれな事態にぶつかった。そして、予想どおり首相は、悲願の沖縄返還を一九七二年までに実現させるというお土産を持って帰って来た。全国民が等しく待ち望んでいたことが、漸やく実を結んだ。

何はともあれ、おめでたい。これが、現地沖縄はもとより、日本国民すべてに共通の感情であつたはずである。

ところが、出発前から沖縄返還を促進し、その時期の言質を米国から引き出すという目的が、大方の国民に受け入れられないばかりか、首相一行は轟々たる非難のなか、およそあとにも先にも国民の代表の鹿島立ちとして、これだけ馬鹿げた警戒は敷かれないだろうと思われる厳しい機動隊の大包囲網の中で、こそこそと飛び立って行かなければならなかった。

そして、日米共同声明の中で、一九七二年返還が発表された時、返還を喜ぶ声はむしろ共同声明に反対する人たちの声に押されて、次第に影の薄いものとなつていった。

沖縄返還運動が、究極のゴール、本土復帰が実現する寸前で、国論が二分されるという悲劇を露呈することになった。その原因については、ここにひとつひとつ書き切

れない。ただ、はっきりいえることは、本土のわれわれの沖縄の人たちに対する理解、思いやり、そして、認識の不足がこのギャップを広げた決定的な要因であることは、われわれにとっては恥ずかしいことだが、事実なのだ。

本土の人の沖縄に対する理解不足を物語る例は、枚挙にいとまがない。それは観光ブームにも見られる。

沖縄にも、本土から数多くの観光客が訪れ、昨年はついに、二〇万人をこえる人たちがこの沖縄本島を「見る」ためにやってきた。そして彼らは、観光バスに乗り、史跡を眺め、戦跡で形通りに頭を下げ、バスガイドの説明を聞いては、沖縄の過去にジェスチャーだけの同情を示しながら、国道一号線や国際大通りを通る時には、もうすでにそんなセンチメンタリズムはさっぱり忘れ、陽気で無責任な、ただの観光客に立ち戻っているのだ。そして、サンゴの海岸を見た観光客は、沖縄は美しいところだという印象を抱いて帰る。ややもすると、沖縄は、基地すらも美しく見えるという。

こういう人たちが増えるということ、いいかえれば、観光ブームは、沖縄の祖国復帰運動にとって、マイナスにこそなれ、決してプラスにはならない。

私自身にとつても、先日、ある会合で同席した知人が語る言葉に、大きなショックを受けた。だが進歩的とはいえないまでも、

比較的柔軟で、平素は思いやりの深い人柄である彼の、その発言の内容は、実のところ、一部の知識人たちの間でも公然と、何の抵抗もなく語られていることなのだ。

彼らの論旨は、過去の沖繩の苦しみを『完全に忘却した』上で、焦点を、今日の基地の島、沖繩の現状に合わせることから始めるのだ。彼はこういった。

「沖繩の人たちは、口では基地撤去、即時本土復帰と言いながら、基地に生活を依存して人員解雇には反対する。その根拠がどうも解せない」。

この考えは、今日の泰平ムードになれた政治的無関心層のみならず、せんじつめれば、いみじくも本土政府の考えもいいあてている。あまりにも過去の沖繩の歴史を無視しているのだ。正直なところ、沖繩の人たちの犠牲の下に、独立を勝ち得て、主権を回復した本土の人たちにとって、つい最近までは、沖繩などはどうでも良い存在だったのだ。自分たちの領土的野心で復帰を策したところで、敢えて盟友米国から相憎つかしを食らうくらいなら、沖繩を米国に預けたまま、ご気嫌をとっておいた方が得策だという思慮が働らいて、これまで日本政府にとつては、沖繩返還にふれることは、むしろタブーでさえあった。死臭残る沖繩は、彼らにとつては、臭いものでしかなかった。それが漸やく、一転して選挙にも有利な状況、これとて所詮、彼等自身が作りあげたものではないが、とにかく状況が譲成しかけてきたと見るや、政府は国民の悲願というより功利的な打算からこの機を促え、それも、沖繩という法衣の下に、北方領土というヨロイをちらつかせながら、この難問を一気に、国論へ持ち上げていった。この

辺の呼吸のとらえ方の見事さは、戦後二〇余年政権を担当してきたテクニクスの故か、実に鮮やかなもののだが、この過程で政府に歩調を合わせ、引きづられてきた国民にも大きな責任がある。

実際、これまでわれわれ日本人は、悲劇の島、沖繩を徹底的に無視しつづけてきた。終戦を目前に、この沖繩は最後の防衛線となり、数多くの尊い人命が失われた。そして、惨めな敗戦である。残されたのは荒廃だけだった。

爾来、沖繩は本土と同様に、米国からの主権回復を望みながら、地道に、しかし力強く、復帰へ踏み出していった。にもかかわらず、悲惨にも、昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約によって頼りとする親元、本土日本から、ものの見事に見棄られ、継子いじめの米国へ里子に出されてしまったのだ。頼りとしていた日本は、経済自立の為に、むしろ足手まといの沖繩を明らかに放棄した。

この時から沖繩は、改めて独自に、地道な祖国復帰運動を歩み始めた。

一方、米国は極東海域の安全の為に、第七艦隊のベースとして沖繩本島を中心に、沖繩を軍事要塞化していった。そして、資源も乏しく、何ひとつとして産業のない沖繩を、経済的には、基地に依存せざるを得ない状況に仕向けていった。いまや、沖繩にとつて基地は、麻薬のようなものになっている。基地経済というのっぴきならぬものに追い詰めたのは、何の行動もおこさず、これを放置しておいた日本政府にこそ責任がある。

この辺の事情にはまったく目をつぶり、血のにじむ苦難の末に、ようやく復帰への足

がかりを捉みかけた沖繩の人たちの胸中も理解しようとせず、表面に顕われてきた現象だけで判断し、あまつさえ、こうした復帰ムードを上手な立振舞いで自分たちの功名にしようとする手前勝手な人たちの行動は、沖繩の人たちにとって、目の上のタンコブでしかない。

日本は、高度成長政策によって、表面的には繁栄を続け、ようやく、余裕もできて、里子に出した沖繩に気がついた時、基地経済という麻薬のなかで辛うじて生き残っている沖繩の良心が、継子いじめの里親と息も絶え絶えに戦っている最中であつたのだ。

戦前は、親元の日本に、戦後は、物質的には米国に、精神的には日本に屈辱をうけ、無視圧迫、迫害を加えられながら、発想はどうあれ、今、とにかく沖繩に目を向けたということとは、辛うじて沖繩にも曙光が見えてきたことなのだ。しかしながら、いずれにしる、沖繩戦や、平和条約締結という、一度ならず、二度までも犯したわれわれの裏切り行為は、純真な沖繩の人たちの心の奥に、どれだけ傷跡を残したか測り知れない。

「人生における失敗は償うことはできる。だが、時、場所ともに決定的な場面で犯した決定的な過ちは、決して償うことはできない」(五味川純平著『人間の条件』より)。過去の私たちは、この決定的な過まちを二度までも犯してしまったのだ。

今、私たちはどうすれば、彼らの望みがかなえられるように手助けしてやれるのだろうか。そう思うのは尊大かも知れない。彼らの苦しみを理解してやることもできなかったわれわれには、そんな立派なことをしてやれるだけの資格さえないのだ。沖繩

の人たちは語る。

「私たちは、物質的には戦前から貧しかった。だから貧困は何とも思わない。悲しかったのは、本土の人たちがもう、完全に私たちのことを忘れてしまったことです」。

そうなのだ。私たちは、ほんのごく一部の人たちを除いて、あの沖繩を実に、きれいさっぱりと忘れてしまっていた。私たちに、今、沖繩の人たちのこれまでの苦難に對して、労わってあげる気持、と同時に今後、祖国復帰のために物心あらゆる面で、協力を惜しんではならない。犯した過まちは償い切れないが、少しでも償ってあげる気持は、われわれ日本人としての心情であり、責任でもある筈なのだ。そうでなければ、この戦いのなかで死んでいった人たちや、復帰運動のなか、志半ばにして亡くなった人たちも救われない。

にもかかわらず、昨年屋良政権誕生の際、今後沖繩が復帰した暁には沖繩経済をどうやっていくのかと不躰に尋ねられた屋良新主席は、「そういう難問を沖繩の人に答えろというのは酷でしょう」と答えたという。屋良主席の言葉は、的確に沖繩の人たちの気持を代弁している。こうたずねたインタビュアーの気持が、われわれ本土の日本人の感情に相通じるものがあつたとすれば、われわれ日本人は、また第三の過まちを犯す可能性がある。この回答は、われわれ本土の日本人にこそ問われるべきであるし、それに明確な回答を出すことを求められているのもわれわれなのだ。そういう意味では、われわれは今、のど元にアイクチを突きつけられているのだ。

今日、沖繩返還は日本本土、沖繩いづれにとつても自明の理として考えなければな

らないのは、少なくとも沖繩が不利な形で帰されることは、何としても避けなければならぬということである。ともすれば、「沖繩が還る」という声を煽りたてる過程で、心から復歸を願う人たちを情的に引きづりこみ、一方では、本来の即時核抜き本土なみ返還を、なしくずし的に遠くへ押しやり、形式的に返還を勝ち得たとて、長い沖繩返還運動は終幕を迎える訳ではない。

一九七二年に沖繩は還る。二大国の首脳が約束した、この取り決めが、そうやすやすと延長されたり、変更されたりすることを疑うようなサイギ心を持ちたくはない。

今日まで沖繩に無関心だった私たちは、沖繩の人たちに取り返しつかない犠牲を強いたことに強く反省し、返還運動は、今、まさに始まったのだという認識のもとに、長くもない返還までの向う三年の間、沖繩返還交渉の成り行きから絶えず目をはなさず、見守っていく義務と責任がある。同時にこの復歸運動を今一度、原点にたちかえつて、終戦から今日までの運動の流れを冷静に考え直すことこそ、良心ある日本人がなすべき課題ではないだろうか。沖繩返還運動とは私たち日本人にとって一体何なのだろうか。その本質を今こそ、真剣に考えるべき時ではないだろうか。